第53巻　第13号　通巻1968号　昭和49年9月2日　毎月第3火曜日発行

教育PRO

EDUCATION PRO

2023 10/31

教育プロは
こころの教育
モラルの教育
創造性の教育を
問い求めます。

【特集号】通信教育の未来像

鼎談「通信制で学ぶ」という未来　ーなぜ必要か、何が必要かー

梶田　叡一　元兵庫教育大学 学長
吉田　洋一　クラーク記念国際高等学校 校長
鍛治田千文　YMCA学院高等学校 校長

通信制高校の可能性を語る

早稲田大阪学園向陽台高等学校／八洲学園高等学校／長尾谷高等学校／秋桜高等学校／YMCA学院高等学校／天王寺学館高等学校／賢明学院高等学校／神須学園高等学校／英風高等学校／大阪つくば開成高等学校／東朋学園高等学校／近畿大阪高等学校／ルネサンス大阪高等学校／相生学院高等学校

No.13

HPアドレス　http://www.erp-kyoiku.com
年間購読料 18,480 円（税込）

クラーク記念国際高等学校 連携校
専修学校クラーク高等学院

「好き」を追求できるコースラインナップ

大阪梅田校　総合進学／プログラミング／パフォーマンス／インターナショナル／eスポーツ
天王寺校　総合進学／デジタルクリエーター／インターナショナル／eスポーツ

鼎談

「通信制で学ぶ」という未来
― なぜ必要か、何が必要か ―

元兵庫教育大学学長　梶田　叡一先生
クラーク記念国際高等学校校長　吉田　洋一先生
ＹＭＣＡ学院高等学校校長　鍛治田千文先生

＜時代は変わった＞

梶田　通信制の高校というと、通常の全日制高校の授業にはついていけない生徒、心身に悩みを抱えていて普通の高校生活に適応するのが困難な生徒たちの受け皿というイメージがあるのですが、これだけで考えてしまうと大きな間違いになります。通信制高校がいま注目されている背景を正確に読み解くには、ここ何十年かの時代の流れを広い視野から見つめなおすことが不可欠でしょう。

昭和25年には42％ほどだった高等学校進学率が、昭和40年には70％、昭和49年には90％を超えて、通信制を含めると現在の進学率は98％になっています。つまり高校進学が当たり前のこととなったわけです。そうなると当然ですが、今の高校にはじつに多様な生徒が進学してきます。いわゆる学力差の問題がすぐに頭に浮かぶでしょうが、それよりもむしろ注目したいのは、生徒のニーズが多様化している、多様なニーズをもった生徒が進学してきているということです。

社会全体をみてもそうですね。よく勉強していい大学に入って一流企業に就職して…という定型的な人生が必ずしも「成功」ではない、という考え方はもうすっかり浸透・定着しています。にもかかわらず、教育の実態はどうでしょうか。1時間目は○○、2時間目は△△、何時に登校して何分間休憩があって、というような一定の型に嵌め込んでしまう学校生活のあり方にどれだけの生徒が耐えられるのでしょうか。

多様な生き方が許容され模索され始めたという社会変化と教育現場の従来型の四角四面の実態とが急速に乖離してきて、そのひずみの中から不登校などの「問題」が噴出してきているのです。生徒たちが悪いのではなくて、生徒たちがもう我慢しきれなくなった…、それが「問題」の実態のかなりの部分を占めているのです。

そういう時代だからこそ、「通信制で学ぶ」という選択肢が必要になってくるのです。「通信制にでも行くか」ではなくて、「通信制だから行く」という積極的な選択が、この新しい教育のかたちを支えているといえるのです。

吉田　言いたいことをかなり言われてしまったのですが（笑）、これからの教育を考えるときに重要なキーワードは「多様性」ということだと思います。今の高校生を見ていると、興味や関心は実に多様であり、また能力も様々、そして学び方に対するニーズも多様であり、そうした生徒たちの多様性というものにどう応えていくか、こうした多様性という時代に即応した高等学校教育はどうあるべきか、ということが問われていると思っています。

私が子どもの頃は情報量も少なく、親や教師が言ったことが絶対なんだという時代だったと思いますが、いまや子どもたちはパソコンを開きスマホをのぞけば膨大な量の情報を簡単に手に入れることができます。もちろんそういう情報化社会には課題も多いのですが、自分でよりよい選択肢を選び取っていくという体験の積み重ねが、結局社会全体の活性化にもつながっていくんだと考えています。

今、全国的に通信制高校で学ぶ生徒が増える傾向にありますが、以前は、通信制の高校は不登校の生徒が通っている所といったようなネガティブなイメージがあったかと思います。しかし、私は、クラークでの学びを選択している生徒たちは、そうした従来型の学びの場から逃避した「逃げ場」としてではなく、むしろ、自分のやり方で学びたいという思いのもとで積極的に通信制高校での学びを選択してくれていると思っています。そして、クラークは、自信をもって生徒たちの多様な学びのニーズに応え、彼らの夢の実現を後押ししていると自負していますし、引き続きそうした努力を続けていきたいと思っています。

私どものクラーク国際高校では週5日登校して学ぶ、つまり通常の全日制の高校と同じような生活パターンの「全日型コース」、特化したカリキュラムを実施する高等専修学校との併修を行う「専修学校連携コース」、登校しての対面授業とオンラインでの授業を生徒が自らフレキシブルに選択して学ぶ「SMART Study コース」、更に在宅で自学自習を基本としながら学ぶ「在宅型コース」といったように多様な学びのスタイルを用意しており、それを生徒が自分で選びながら学んでいきます。

もちろん生徒たちの多様な教育ニーズに応えていくためには、学校側としても生徒たちの学びをサポートするために体制を整え、多様なシステムを用意していかねばなりません。そういう意味では、クラーク自身もまた生徒たちに育てられてきたとも言えでしょう。

通信制高校の役割は、今後ますます大きくなっていくでしょうし、また通信制ならではの可能性もますます大きくなっていくものと思っています。

鍛治田　通信制に入学してくる生徒は、それまで随分傷ついて行き場を失くし、自分はダメだと自己肯定感を失ってきている子たちがたくさんいます。そういった生徒に対して本校をはじめ、大阪府認可の通信制グループは、“学校が安心できる場”だと感じてもらえるよう努力しています。どんな先生に出会うか、どんなカリキュラムに出会うかで生徒は変わりますね、環境が変わるとこんなにまで人って変わるんだと実感しています。

世間一般には「高校卒業神話」のようなものがまだ残っています。「高校だけは卒業しなければ」と苦しんでいる子どもやその家族を見受けますが、進学率を見ると梶田先生が最初に言われたように高校はもうほとんど義務教育同然になってきていて、高校義務化にしてはどうかと思ったりします。縛りもでてくるかもしれませんが、そうなるとどの高校も通信制のように自分にあった学び方が自由に選べて、どれほど楽になるかと思います。今、通信制にはそういう子供を迎える役割も期待されていて、多くの通信制は、高校生活は無理のないステージから始め、徐々にペースが作れるよう、週1日から週5日までの通学の選択できるなど多様な学びを提供しています。

吉田　通信制高校だからといって、たんに高卒資格を与えればいいとは思っていません。クラークでは高校卒業に足る学びを確保するため、クラーク独自のWeb学習システムを構築するなどして、生徒一

人一人の学びをサポートしています。幸いにも通信制高校の場合には全日制と比べてより自由な時間が確保できますので、そうした時間を活用して、様々なコースを設定し、それぞれの生徒の興味や関心に応えられるよう取り組んでいます。クラークとしては、全日制の部活動よりも濃い活動が可能になっているんじゃないかと思っています。

また、企業と連携したPBL活動やプロスポーツのチームと連携したスポーツ活動、ネイティヴの先生による濃密な語学教育などなど多様な学びの場を用意しています。特に先進的だと思うのは、クラークでは「宇宙開発プロジェクト」というものに取り組んでいるのですが、この取り組みの柱は高校生主体による人工衛星の制作でして、恐らくこのような取り組みをしている高校は他にはないのではないかと思っています。既に人工衛星の本体は完成しており、今秋にもフロリダから打ち上げられる予定です。こんな大きなプロジェクトも、旧来のカリキュラムに縛られた状況の中では、とても無理だったのではないでしょうか。

＜個別最適な学びと協働的な学び＞

吉田　令和３年１月に出された「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」という中教審答申における重要なキーワードは「個別最適な学び」と「共同的な学び」の実現ということです。これは、大変大事な視点だと思っています。「個別最適な学び」について、中教審答申では、従来言われてきた「個に応じた教育」を学習者の視点から整理した概念だと言っておりますが、こう言ってはなんですが、個に応じた教育なんて通信制の高校ではもうとっくにやってきたという自負がありますね。

個に応じた教育ということで「習熟度別クラス編成」といったことが行われきましたけれども、しかし、いくらクラス分けしても限度はありますし、そのクラスのなかでも習熟度の差は必ず出てくるはずです。つまりグルーピングするだけでは根本的な解決は難しいということです。

クラーク国際高校では１対１の教育を実践しています。ＩＣＴを活用するなどして生徒一人一人の学習状況を把握し、サポートしています。通信制ならではの個別指導と言えるかと思います。

鍛治田　個別最適では、「あなたにあった教材を渡します」だけでなく、自分で学びを進められない生徒には、それをどのように使うかなどのフォローが大切ではないでしょうか。

チャットＧＰＴなどで多様な学習形態が可能になってくると思いますが、大切なのは、どのように動機付けをするかでしょう。「誰かが自分を見てくれている」そう感じてもらえるように見守り、時には背中を押す存在が大事で、そこに教師の出番があると思います。

そのようにして一人一人の違いに対応して行くと、個別最適化とオンライン授業とはイコールにはならないですね。例えばＹＭＣＡでは、本人の希望により廊下での受講、試験などは別室や時間延長も可能です。起立性調節障害の生徒のためには午後からの試験時間なども設定し、生徒それぞれが力を発揮できるよう合理的配慮システムを整えています。このように課題のある生徒に丁寧に対応している通信制も多くあり、これらも個別最適化と言えるのではないでしょうか。

また、私たちは生徒たちへの「学習」「心」「身体」の３つのケアに取り組んでいます。例えば「心のケア」では、カウンセリングだけではなく、ピアサポート、つまり仲間同士の支え合いも大切だと考えています。学校に通いづらい生徒にはオンラインでHRをしているのですが、“同じ仲間がいる”という気づきがあると「顔出し」をし、仲間とのつきあいが始まり、関係が深まっていきます。こういう過程をゆっくり重ねて行くことで、対面で会うときの不安がなくなります。「君が生きてるだけで嬉しい‥」という声掛けを続けた結果、「顔出し」できなかった生徒が毎週HRに出てくれるようになり、通学するケースもあります。

梶田　「個別最適化」ですが、言葉の一人歩きはまずい、とかねてから思ってきました。厳密に考えると無理なんです。「最適な学習がある」という前提でしょ。でもそんなものなんて後から振り返って想定してみるだけで、その場その場ですぐに見つかるわけないんですよ。

教師の側が「これが最適だ」なんて押し付けるのは危険です。子供たちが自分なりの花をどう咲かせるかを待つことです。もちろん独りよがりの決定にならないように見守る必要がありますけど。さまざまな場面に出会って経験を再構成しながらそれぞれのご縁を大切にしながらその子なりの大きな花を咲かせて大化けしてくれればいいんです。その子の咲かす「花」を教師が決めることなどできないのです。

通信制に話をもどしますが、学習指導要領に示された学習の目標をそのまま高校、中学校、小学校へと下ろしていくという発想に縛られないことが大切です。私に言わせれば必須の学習つまりコアは「読み書きスマホ」ですね。英語教育に熱心な人もいますが、100％の人がペラペラ英語を話せるようになる必要があるのでしょうか。必要のある人は一所懸命勉強すればいいのですが、必ずしもそうではない人は英語的な表現の感性に触れておけばそれでいいのです。

私風の表現で言えば「英語のにおいにふれる」。数学も同じです。本当に高度な数学が必要な人なんて限られています。そうじゃない人は「数学のにおい」をかいでおけばいいのです。

でもそういう「においだけ」教育を全日制でやれと言っても無理でしょう。そもそもそういう仕組みになっていませんからね。そこで通信制！なんです。通信制は近代以降の学校の仕組みを変える一つのモデルになりうると思います。

＜主体的、対話的な学びへ＞

吉田　クラークでは、「２１世紀型教育」を推進していますが、その狙い、目標は、生徒一人一人を「自律的学習者」として育てるということです。先生から教えられたことを学ぶということだけでは、これからの困難な時代を生き抜いていくことは難しい。様々な課題に直面しても、自ら解決策を見出していける問題解決能力が必要であり、そのためには生涯にわたって自ら学び続けていく力が不可欠だと思っています。こうした中で、生徒を自律的学習者として育てていくためには、生徒が自ら学びに向かっていけるよう支援していくことが必要であり、そのために重要になってくるのがコーチングということです。クラークでは「２１世紀型教育」を推進し効果を上げていくためには、ティーチングも大事だが、それ以上に先生によるコーチングの力が問われることになると考えています。まさに「ティーチングからコーチングへ」です。クラークでは、教師が一方的に勉強を教えるのはなく、「その人に合った学び方を引き出す」ということに力を入れています。

私は、生徒に対して、主体的な学びを通して学び続ける力を身につけてくれることを期待しています。さきほどの「個別最適化」と「主体的な学び」を合体させることで、みずから進路を決定できる生徒に育てていきたいと思っています。

また、「対話的な学び」という点については、Zoomでのオンライン授業や限られたスクーリングでは難しさもあります。例えば、在宅型の生徒には年２回、18日間のスクーリングを義務付けていますが、対話的な学びという点では必ずしも十分ではありません。他者とのコミュニケーション抜きで生きていくということはあり得ません。ですので、通信制という枠のなかで「対話的な学び」をいかに効

果的に展開していくか、この課題にもしっかりと向き合い、取り組んでいきたいと思っています。

梶田　たしかに通信制の場合、対話型の学びをどう保障していくかは重要な問題ですね。一つのヒントになるかもしれませんが、私は「自己内対話」に注目してみたらと考えています。私はもう何十年も日記を書いているのですが、自己と対話し続けることでそれが他者との対話、他者理解の深まりを生む基礎へのきっかけとなるのではないかと思います。

鍛治田　さきほどの「最適化」の話とも関連するのですが、「あなたにはこれが最適です」なんてやはり無理がありますね。その「最適さがし」の一つとして全日制で不登校と認定された生徒が、通信制で36単位までとって全日制に戻る「全通連携」の試みも今後、全国で広がっていくのではないでしょうか。

“体験の経験化”が大切だと言われているとおり、経験不足で安易にバーチャルの世界に逃げ込む生徒が多いという現実がありますが、通信制であっても生徒たちが創る「場の力」「集団の力」に期待したいと思います。そうなるには生徒同士が関係性を築けるような教員の働きかけが重要で、時として奇跡と思えるような成長が見られます。私たちは人は人の中で成長すると考えていますので、生徒たちが主体的に協働する授業や学校行事に重きを置いています。特別活動や総合探究の時間をどう有意義に組み立てるかも課題です。通信制だからこそ、そこに力をいれる必要があると思いますし、可能性を感じています。

＜未来へむけて＞

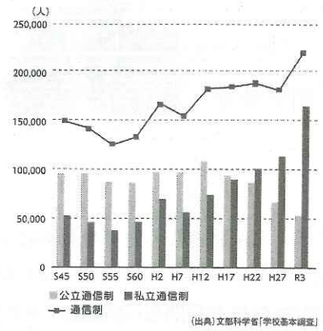
吉田　クラークの生徒の約６割が、中学時代、あるいは他の高校で不登校を経験しています。残りの４割の生徒についても、何らかの課題や困難をかかえて青春時代をすごしてきた人が多いのではないかと思っています。しかし、クラークでいきいきと学んでいる生徒の様子を見たら、そんなことは信じられないのではないでしょうか。生徒たちは皆、変わり得る、可塑性があるということです。クラークの先生は、皆さん、そうした生徒たちの良き伴走者として、共に学び共に成長したいと思って入職してきたのだと思っています。そうした思いを大事にしながら、生徒たち自身が自分の成長に気づくように、実感できるように支援していって欲しいと期待していますし、それがコーチングの考え方ではないかと思っています。

梶田　おっしゃる通り、いままでの教員養成はティーチングに偏っていた感がありますね。コーチングの能力をどのように鍛えていくかは今後の課題でしょう。

最後に通信制にとってもっとも必要な要件を再確認しておきましょう。それは、必要最小限の学習の場を用意しておけばいという単純な後ろ向きな考え方ではダメだということです。現代の子供はそれでは満足しません。また最終的に社会に出て生きていくには、必要最小限では十分ではありません。多様な学びを体験し経験化していくことが生きる力に結びつくのです。

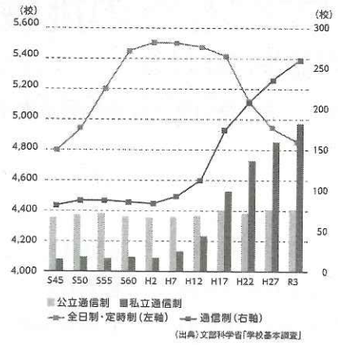
吉田先生も指摘されていましたが、単位習得だけが高校に通う目的ではないということです。「高校だから～」「○○だから～」という概念のなかに自分を押し込めないでほしい。多様なニーズに応える開かれた生き生きとした学びの場として、通信制がこれからの学校や教育の在り方を実践し提言し続けてほしいと思います。

■高等学校の生徒数（公私別推移）



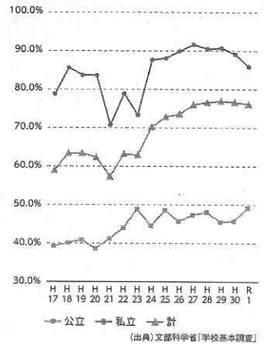
（出典）文部科学省「学校基本調査」

■高等学校の学校数（公私別推移）



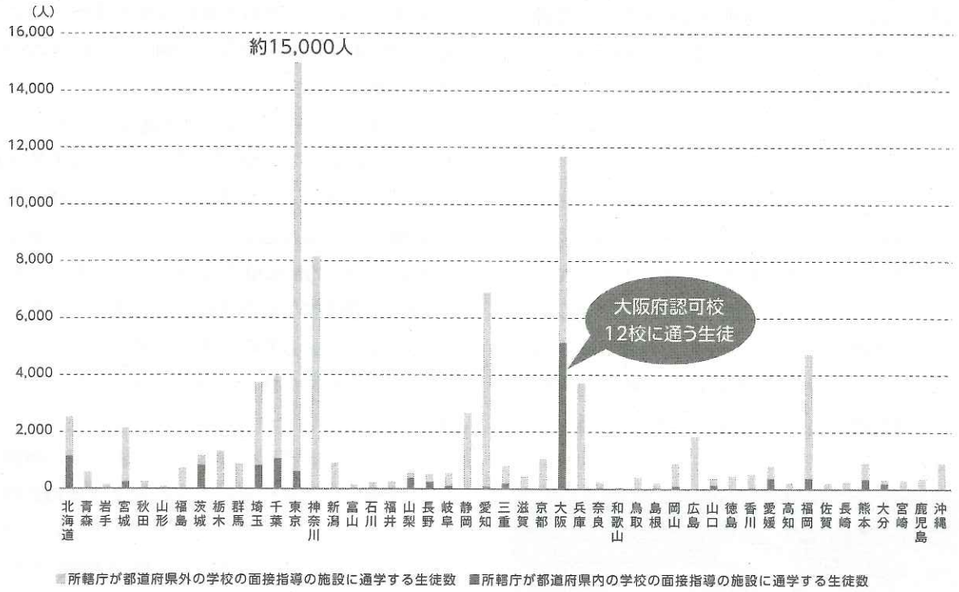
（出典）文部科学省「学校基本調査」

■通信制課程の単位修得者数（公私別推移）



（出典）文部科学省「学校基本調査」

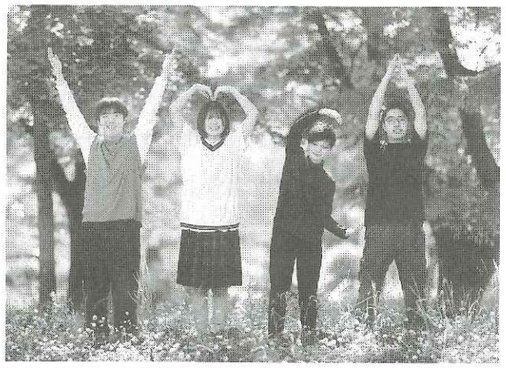
■広域制通信制高校が大都市圏に集中する現状



（出典）文部科学省「広域通信制高等学校の展開するサテライト施設一覧」（令和元年５月１日現在）より作成
※近畿大阪高等学校は2023年度開校のため含まない

あなたがあなたと出会う場所にしたい

YMCA学院高等学校 校長 鍛治田千文



■立て直しのために

2015年、私はYMCA学院高校に副校長として着任しました。その頃は、２年間で200人もの生徒が減り、立て直しを図ることが私への特命でした。当時、教職員たちは“生徒は傷つきやすく壊れやすい”と考え、腫れ物に触るように接していました。授業中、帽子をかぶっている生徒がいても「脱毛症かもしれない、傷つけたくないからそのままそっと‥」の対応。生徒たちによる“発表会”を提案すると、「そんな負担は生徒にかけられない。そんなことを頼むと生徒は来られなくなる」。生徒を思いやる気持ちからの接し方でしたが、結局のところ生徒に関わっていないのではないかと感じました。先ずは生徒に素直な関心を寄せ言葉をかける。状況を見ながら背中を押してチャレンジを促す。生徒と交わり、対話する“関わる学校”にしたい。そんな思いからのスタートでした。

■YMCAの祈りと通信制単位制・総合学科の開設

YMCAは1844年に英国ロンドンで誕生し、世界の１２０の国と地域にある社会教育団体です。「すべての人をひとつにしてください」というイエスの祈りに励まされながら、180年の歴史の中で、次の世代のために「知性」「精神」「身体」の三つのバランスの取れた人の育成を目指してきました。

1990年代、日本では全国的に不登校や高校中退者が増え、彼らが行き着いたのが従来は勤労青年のための学び場だった通信制高校でした。そのように不登校などで進路変更を余儀なくされている生徒たちに対して、希望を持って共に生きる社会の実現というYMCAの願いと資源、蓄積してきた専門的なノウハウを活かして高校を開設することが必然と考え、2002年通信制単位制・総合学科の本校を開校しました。

■生徒に届けたいこと

2022年に学習指導要領が改訂され、従来の「知識・技能」に加えて「思考力・判断力・表現力、学びに向かう力」も育成することになりました。本校では体験を通した活動などで、既にそれらを培っていましたが、ただこれらは、従来の“能力重視”に変わりがありません。本校では、それよりももっと大事なものがあると考えます。それは「できる、できない」でなく、“その人の存在”そのものです。生徒がそこにいる、すべての生徒がそれぞれ存在していることに価値がある。命そのものに価値があること。「あなたがここにいるだけでいい」「あなたがそこにいるだけで私は嬉しい」私たちはそのメッセージを出し続けています。「自分は生きている価値がない」と思っている生徒たちにぜひ届けたいメッセージです。

■生徒との約束

生徒に“関わる学校”になる取組の一つとして、「生徒との３つの約束」を作りました。「『自分を大切にする、周りの人を大切にする、学びをあきらめない』これを守ろうとしてくれますか？」すべての生徒にこの問いをすることにより生徒層が激変しました。「通信制だから簡単に卒業できる」と安易に入学する生徒は皆無となり、「勉強がしたかった」「学び直したい」と思っている生徒が入学するようになりました。事実、どの授業においても熱心に取り組む生徒の姿を目の当たりにして、ここに至るまでのそれぞれの背景に心を寄せる日々です。

本校の生徒は９割以上が不登校の経験があり、背景やそれぞれがもつ悩み、課題も違い、求めているものも異なります。学校運営の視点なら、同じような動機や学力、進路の生徒ばかりの方が教育活動はやりやすいかもしれません。が、何かあるごとに“建学の精神は何だったか、学校は誰のためにあるのか、何のための学校か”と立ち返ります。いろいろな生徒が様々な夢と荷物を背負って集まり来る中で、当然摩擦も起こります。しかし、それこそが社会です。人は出会いの中で葛藤があり、豊かになります。私たちは生徒と誰かをつなぐための労を惜しみません。

■３つのケア：①学習のケア

「知性」「精神」「身体」のバランスの取れた人の育成を旨とするYMCAの願いどおり、本校は「学習」「心」「身体」の３つのケアが特色です。「ＳＳＴ」「傾聴トレーニング」や「五感を感じる」など体験を通して関係性を築く特色ある科目や、中学からの学び直しの科目もあります。また、経験の浅い生徒たちが職業や社会のことに少しでも触れられるよう一般社団法人ひらくと連携し、自然の中での活動や多彩な職業人との出会いを提供しています。

2019年からは、誰もが安心して学べ、またしっかりと学力がつくことを願い“合理的配慮”を取り入れています。生徒の中には、起立性調節障害(OD)、過敏性腸症候群、発達障害など課題や不安を持つ人がいます。今では25%の生徒が合理的配慮を願い出ており、拡大コピーや指名回避のほか、廊下受講希望者には、各教室の外に専用席を置いています。試験では別室、開始時間調整、時間延長など多岐に渡ります。煩雑ですが、生徒が本来の力を出せるよう教職員で連携して取り組んでいます。

一方、個人への対応だけではなく、誰もが安心できる学校であるために、ユニバーサルデザインへの取り組みも始めています。静かな場所を好む生徒のための「サイレントフロア」、読みやすい「UDフォント」や外国籍生のための「やさしい日本語ガイドライン」の活用、生徒の呼びかけは「○○さん」で行うなど。まだ途上ですがこれからも積極的に取り組んで行きます。

外国籍の生徒も受け入れています。彼らが入学できる高校は少なく、日本語学習を中心としたカリキュラムで高校卒業を目指しています。日本の文化や学校のシステムも分からず、日本に来たことさえ納得できていない生徒もいます。学校と保護者とのコミュニケーションも難しい状況ではありますが、同法人の日本語学校の教員と共に、このコースを作り上げて４年目。困難は大きいのですが、生徒や家族の幸せ、またそれは社会の幸せにつながると考えています。

■３つのケア：②心のケアと③身体のケア

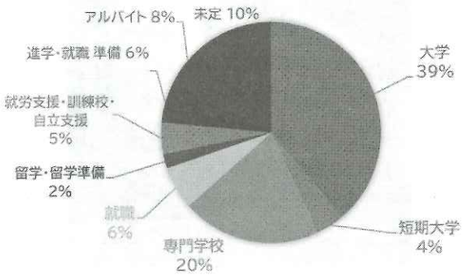
友達作りや居場所作りのため、「わいわいカフェ」などを実施しています。また、それぞれに様々な背景があり、関係機関とつながる必要があるため、カウンセラーだけではなく今年度からは常勤のＳＳＷを採用し、家庭も含めた生徒支援も行えるように努めています。

特に、ＯＤなど健康に不安をもつ生徒は、学びをあきらめたり卒業が延びたりするケースがあり、その生徒たちの身体づくりのために、関西医科大学・公益財団法人大阪ＹＭＣＡと連携してプロジェクトを立ち上げました。2021年には大阪府学校経営推進費支援校に選ばれ、同大学医師の講演やオンラインの健康講座を毎週開催、ウエラブルデバイスを着用してストレスチェック等の実施。その結果、

2022年度は前年度比で筋力測定は平均175%、歩数変化(活動力測定)では平均180%となりました。自己効力感評価でも向上がみられています。同じ立場で話せる場を作ったことから生徒たちのグループ活動もはじまっています。彼らのためのキャンプでは「自分が必要とされる充実した時間を過ごした」「病気は自分だけじゃないと思った」など生徒の生きる力となったようです。

■高校卒業

以上のような様々な取り組みにより、着任当初、毎年60人以上だった退学者が、近年20人程に減りました。進路は、進学63%、就職6%、留学(準備含)2%、就労支援5%、進学・就職準備6%、アルバイト8%、未定が10%(22年度)となり、進路決定率が高くなっています。



生徒にとって高校卒業は単なる学歴ではなく、自身への誇りと大きな自信になります。頑張った自分にエールを送る生徒たちに、私たちも精一杯の拍手を送りたい。本校を通して一人ひとりが多彩な出会いを経て、新しい自分に出会い、幸せを感じ、それぞれの社会を拓くことを願っています。

「一人がよくなると世界がよくなる」YMCAのキーワードです。生徒たちが卒業後もずっと自分らしく、豊かで幸せな人生を歩めるよう、私たちは教育活動を進めていきたく思います。